

熊本藩の医学校と薬園

——村井椿寿(琴山)の薬物会をもとに——

松崎 範子

熊本大学医学部同窓会 熊杏会

受付：令和3年6月14日／受理：令和3年10月4日

要旨：熊本藩は、宝暦6年(1756)に医学校と薬園を設立した。母体となったのは初代教授村井見朴の家塾であったが、教育内容の向上に取り組んだのは見朴の長子椿寿である。椿寿は京都に遊学して吉益流医術を学び、熊本藩の医学教育に取り入れた。同時に大坂の戸田旭山の指導のもと薬物会を開いて薬草・薬木についての知識を深める場を設け、見朴の門人で薬園の管理をしていた藤井氏をその専門家として育てた。すると医学校での薬物学の指導は、藤井氏が受け持つこととなった。旭山とは平賀源内や田村藍水(後に幕府医官となる)とともに、江戸・大坂で薬品会を開催した人物である。熊本藩の医学校は、見朴の方針を引き継いだ椿寿によって教育内容が高められ、江戸期を代表する漢方の医学校となったのである。

キーワード：村井椿寿(琴山)、医学校、薬園、戸田旭山、平賀源内

はじめに

日本では中国から伝来した医学が、独自の展開をみせて漢方医学が発展する。熊本藩では漢方医学のなかでも、漢の張仲景を範として『傷寒論』『金匱要略』を重視する古方派が台頭した近世中期、宝暦6年(1756)に再春館という医学校が設立された。開講にむけて尽力をしたのは、村井見朴・椿寿(号：琴山)父子である。見朴が初代教授となり、椿寿も師役となるが、開講から6年後に椿寿は辞職して、同13年に京都の古方派医師吉益東洞に入門する。吉益流医術を学んで熊本に戻った椿寿は、家塾で多くの門人を指導した。椿寿の教育活動を評価した藩は寛政8年(1796)に家臣として召し抱え、椿寿は藩医として再び医学教育に関わることとなった¹⁾。

熊本藩の再春館は、近世初の公立医学校とされる藩の医学教育機関である。藩による医学教育機関の創設に関して海原亮は、「一見、藩の主導のもとで、独自の医制確立を目指したともみなし得

るが、実際には既存の学統に依拠する部分が依然として大きく、組織としての機能は不十分なまま推移した」と指摘するように²⁾、再春館も見朴の家塾復陽洞を母体としたことで、見朴が死去すると学生数が減少し、創設から15年後の明和8年(1771)には藩庁奉行所近くに移転して、藩による指導が強化された³⁾。すぐに医学教育機関として確立していたわけではなかった。では椿寿は、再春館に吉益流医術を取り入れるだけでなく、再春館の教育体系を築くうえでどのような役割を果たしたのであろうか。

この点について本稿では、藩の薬園(蕃滋園)と医学校(再春館)の関係もとに検討していくのであるが、記述においては薬園が医学校とほぼ同時に開設されていることに着目する。近世中期の薬園設立の目的として、社会対策や殖産興業などがあげられるが、熊本藩では藩による医学教育の開始と並行して薬園が開設され、同9年から再春館で閩草会という薬草研修会が始まった⁴⁾。開催にあたって規約を作成したのは椿寿であったが、

吉益東洞に入門してからは『薬品考』(明和5年刊1768),『方極刪定』(安永4年刊1775),『薬徴続編』(天明7年刊1787)という医学書を刊行した。これらの内容は、医師が処方用いる薬種や調剤に関するもので、なかでも『薬量考』は『傷寒論』『金匱要略』にもとづく中国漢代の薬用量を、江戸時代の換算法で示したものである。ところで、椿寿は医学書ではない『熊府薬物会目録』という、熊本における薬物会の開催記録を残している。序文を記したのは宝暦14年2月、京都での修業中である。このことから推測されることは、椿寿の遊学の目的が吉益流医術の習得だけではなかったことである。

本稿ではこの『熊府薬物会目録』を取り上げるが、記述においては椿寿の薬物学に関わった人物として、熊本藩主細川重賢と蕃滋園の役人藤井源兵衛、及び『熊府薬物会目録』に登場する大坂の本草家戸田旭山との関係を見る。旭山が椿寿の薬物会に出品して評を寄せていたことは知られており、薬品会の地方への伝播として取り上げられるが⁵⁾、本稿では藩主重賢の医学校・薬園との関わり方、及び熊本藩側から椿寿の薬物会を検証して、医学校と薬園を併設することで実践された再春館の教育内容と椿寿の関係について詳しくしたい。

一. 江戸中期の薬品会と熊本藩

①江戸・大坂における薬品会の始まり

物産学が盛んになったのは、徳川吉宗の享保改革期である。吉宗は薬草・薬種の国家的な管理体制を確立するとともに、甘藷や蘆などの殖産興業政策や朝鮮人参などの輸入品の国産化を推進した⁶⁾。このために紀州藩時代からの家臣植村左平次を江戸城奥御庭方として重用し、採薬使として何度も各地に派遣したほか、日光や久能山に開いた人參試作場の監督にもあたさせた。そして市井の本草学者丹羽正伯・阿部将翁・野呂元丈らを採用するいっぽうで、薬品鑑定のためには享保6年(1721)2月に、本草学者稻生若水から学んだ京都の松岡恕庵(玄達)を江戸に呼んで、翌年6月和薬改会所を創設した。その門人が小野蘭山や戸田

旭山・直海元周などである。これらの人々は医家でもあった。

宝暦期には江戸や大坂で薬品会が盛んになる。その中心人物の一人が平賀源内である。源内は宝暦6年(1756)ごろ大坂の戸田旭山に入門して医学・本草学を学んでいたが、同年5月には江戸に行き田村藍水に入門した。藍水は阿部将翁に学んだ医家・本草家で、宝暦7年以降、弟子の源内らとともに江戸で開いた薬品会を、物産学へと発展させたとされる。藍水は第1回薬品会が源内の提唱によったことを、源内の著書『物類品隲』(宝暦13年刊)の序文に記している。源内は同8年4月には藍水が神田で開催した第2回薬品会に5種を出品、同9年8月18日の第3回薬品会には50種を出品した。源内が第1回から第3回までの薬品会の記録としてまとめたものが「会薬譜」である。そして同12年閏4月には「東都薬品会」を開く。趣意書には源内が会主となって主品50種を準備したとある。「会席」については「大坂にてハ戸田斎(旭山)先生より諸方産物取集相送り候約束ニ御座候⁷⁾と、大坂の旭山が諸国から集めた物産を江戸の源内のもに送ったとあり、旭山との師弟関係が続いていたことがわかる。

いっぽう大坂にいた旭山も、同10年4月15日に大坂常安寺で薬品会を開催した。これに源内も藍水とともに出品した。旭山は翌5月に薬品会の記録『文会録』を刊行する。源内は同書に跋文を書き、同11年の旭山著『病名補遺』には序文を寄せている。いっぽう藍水は同13年に幕府医官として登用されるのであるが、源内も同年、『物類品隲』を刊行した。これは源内が藍水に師事した後に、田村門下で開催した薬品会の成果をまとめたもので、序文は藍水によった。このように宝暦期には、田村藍水・平賀源内・戸田旭山の3名の師弟関係によって江戸や大坂では薬品会が盛んに行われた。

②再春館における鬪草会の始まり

宝暦期の熊本藩についてみる。この時期は藩主細川重賢(在位:1747-1785)のもとでの藩政改革期である。人材育成を重視した重賢は、宝暦4

年(1754)に藩校時習館を設立すると、2年後の同6年に医学校(再春館)と薬園(蕃滋園)を設立した。再春館は公立医学校の始まりとされるが、その母体となったのは城下居住の町医村井見朴の家塾復陽洞である。再春館が創設されると見朴は初代教授となり、長子椿寿も師役となって再春館の基礎を築いた。では蕃滋園はいかに設立されたのか、この点については椿寿の父見朴の家塾時代から説明する必要がある。

再春館の初代教授となった見朴であるが、医師としての修業は父林田知安によるもので、藩外での遊学経験はなかった。しかし遊学の希望は強く、自宅に復陽洞という家塾を開いて門人を教育するいっぽうで、『一本堂薬選』⁸⁾という薬物に関する医学書を刊行した京都の古方派医師香川修庵に書簡を認めている⁹⁾。このなかに次の文章がある。

夙ニ足下ノ風ヲ聞キテ私窃ニ之ヲ慕ヒ、医事ヲ論スル毎ニ未タ嘗テ東向跂望シテ、老生足下ヲ之レ揚言セズンバアラス、然レドモ門ニ倚望ノ老アレバ、笈ヲ負ヒ遠ク遊ソデ平 生ヲ談スルコトヲ得ザルハ実ニ憾トスベキノミ(中略)、門人医ヲ問フモノ益々進ムモ亦タ々足下ヲ想フノ心日ニ倍々転タ切ナラザランヤ

ここに記されていることをまとめると、見朴は修庵の学問を慕って入門を望んでいるが、自分を頼って修業する門人がいるので熊本を離れることができず、誠に残念である。そして家塾での指導においては、門人からの質問内容が日々進化しているので、修庵のもとでの修業願望が募るばかりという。見朴は古方派の医術に深く関心を持っていたのであるが、ついに修庵への入門が実現することはなかった。

このように『一本堂薬選』などの医学書を入力して、独自に医学や薬物学を学んでいた見朴であったが、薬の処方においては薬用量がつかめないと、学問の師である藪慎庵への書簡に記している。その部分が次のものである¹⁰⁾。

朴ヤ嘗テ薬方分劑ノ量ニ疑ヒアリ、咨詢シテ得

ズ、是ニ於テ景岳ノ律原頗ル心ヲ殫スト雖モ、今ノ用フル所果シテ何代ノ度量権衡ナルヤヲ知ラズ、往歳中根元珪^(註)ノ律原発揮ヲ得テ之ヲ讀ム(以下略)

ここには見朴が薬種の配合にあたって、中根元圭が元禄5年(1692)に刊行した『律原発揮』という律・度・量・衡の4項目からなる数学の概論書を読んでみたとある。中根元圭とは和算家であって医師ではない。配合の分量に悩む様子が伝わる。

また見朴は、薬性に対する知識を深めるために家塾で闘草会を開いていた。この内容をまとめたものが「享保十八癸丑上巳闘草録」¹¹⁾である。闘草会とは薬草を持ち寄って薬性の知識を高める研修会のことであるが、幕府が薬種政策を展開していた享保期から、熊本では見朴によって始まっていた。この闘草会を再春館に引き継ぐことを意図していた見朴は、再春館の敷地にも藩の薬園とは別の、医学生のための薬園を設けていた。再春館の学則である『再春館会約』「日課」の第1条で、「物産は専ら医師の業にあらざれども、薬性を知るには物産を先とする、薬性を知らずんば方法に熟しない、方法に熟せずんば病を治することが出来ない」¹²⁾と、薬性を学ぶことの必要性を説いている。

再春館で闘草会が始まるのは、開講から2年後の同9年のことである¹³⁾。その規約が椿寿作成『再春館学規』にある「闘草節儀」で、再春館の年中行事となった。毎年4月20日ごろから藩内各地に採集旅行に出かけて、5月4日までに帰還すると、同6日に闘草会を実施した。ここでは採集品のほかにも、多くの薬品や物産を陳列して検討が行われた¹⁴⁾。椿寿は見朴の方針を引き継ぎ、医師が自ら薬種を採取して治療に供することができるように、闘草会を始めたのである。

③再春館・蕃滋園と幕府医官

ところで再春館と蕃滋園は同年の開設であるが、蕃滋園がわずかに早い。藩主重賢の事蹟をまとめた『銀臺遺事』には、「医道を学んもの、草の

やう知らではあるべからずとて、建部といふ所に、^(藩)薬園をひらき繁滋園と名付さま一の薬草を植ゑて、物産を知る便りあらしむ」とある¹⁵⁾。宝暦6年7月に藩医福岡玄齋を薬園仕立てに任命すると、翌8月に城下建部の地に500坪を与えて薬園を設立し、種々の薬草・薬木を植ゑさせた¹⁶⁾。次に同9月から同12月にかけて薬園請込役の藩医3名を任命すると、同10月には薬草・薬木の管理役として藤井四郎兵衛(源兵衛のこと、以下の記述では史料に多出する源兵衛を用いる)を置いた。同年12月に再春館を創設すると、蕃滋園は再春館附属となった。

蕃滋園の扁額は幕府の本草家野呂元丈によって書かれた。同7年6月には完成しており、翌8年6月に藩主の側近から渡されて掲げられた¹⁷⁾。いっぽう再春館の扁額については村井椿寿著「椿寿雑録」¹⁸⁾に、野呂元丈と同様、幕府医官今大路道三に依頼したとある。藩校時習館の扁額は初代教授秋山玉山によったが、再春館や蕃滋園の扁額は幕府医官によるものであった。

再春館や蕃滋園の扁額を幕府医官に依頼した理由を考えるうえで、同7年6月に完成していた扁額が、翌8年6月になって再春館に掲げられていることに着目する。この時の藩主重賢は蘭癖大名といわれ、多くの大名と交際があったが、博物学のさがけとして多くの動物・鳥類・植物の正写図を残したことで知られる。これらの正写図には当時から目録が作成されていた¹⁹⁾。同目録には動物図譜として「毛介綺煥」、鳥虫類図譜として「群禽之図」以下5点、植物図譜として「艸木生写」以下10点の記載があり、特に植物図譜が多い。書写時期は年代が判明するものとして、鳥虫類図譜「游禽図」が宝暦5年9月で最も早く、同6年は動物図譜「毛介綺煥」・植物図譜「百卉倅状」、同8年が鳥虫類図譜「昆虫胥化図」・同「虫類生写」・植物図譜「艸木生うつし」・同「押華蝶」である。つまり医学校・薬園の開設と並行して重賢の生写が始まり、盛んになっている。以上のことから窺い知れることは、重賢と幕府医官や本草家との接近である。

これを示すかのように、平賀源内の著書『物類

品隲』には、源内の師である田村藍水が宝暦8年に熊本藩で調査をしたという記述がいくつもある。先にみたように藍水は、同7年以降弟子の源内らと江戸で薬品会を開催して、本草学を物産学へと発展させた人物である。同書には熊本藩の物産について記述があるので、次に整理した。

- ・「黄石脂」は、肥後宇土郡産は上品で蜜産と同じ。「戊寅」(宝暦8年)に田村先生が初めて持参
- ・「螺類の化石」は、肥後芦北郡イカブチ山産は上品。田螺の化石。
- ・「巴戟天」は「戊寅」に田村先生が入手したもので、「己卯」(同9年)に主品中に持参。
- ・「苺若」(和名ホメキクサ)は、肥後方言でハシリトコロ。
- ・「山豆根」は往年唐商人から購入していたが、近年日本産を得た。肥後上益城郡二王木山産は方言でイシャタフシ。「戊寅」に田村先生が入手。「己卯」に主品中に持参。
- ・「忍冬」(和名スイカズラ)は、肥後産は葉が大きく厚く濤毛あり、花が大きい。
- ・「沙箸」(肥後宇土郡御輿置産)は、方言ウミカンザシ、又はサギノソウメンという。海辺砂中に生じ、その形は箸のようで色は非常に白い。「己卯」に主品中に田村先生が持参。
- ・「枸杞」は、「戊寅」に田村先生が西遊して入手。枝に刺が無く実の形が少し異なる。
- ・「虫冉蛇骨」(にしきへびの骨)は、肥後阿蘇郡坂梨手永尾籠村産が大きく、「壬午」(同12年)の客品中に東都の能勢氏が持参。

これらの記述から判明することは、藍水が宝暦8年の西遊では熊本藩にも滞在して、「黄石脂」「巴戟天」「山豆根」「沙箸」「枸杞」などを入手したことである。そして翌9年の江戸の薬品会に、藍水がこれらの品を持参したという。そればかりか源内の『物類品隲』には、藩主重賢との関係を示す次の記述がある。

- ・「禹余糧」(和名イワツボ)は、東都白銀台、

細川侯別荘溪潤中庭は上品である。

- ・「鼯鼠」（和名キネズミ）は、「壬午」（同12年）に肥後熊本侯、珍蔵を客品中に持参。

この記述は、藍水もしくは源内が熊本藩の白銀台にある江戸屋敷に行き、「禹余糧」を実際に見たという内容である。そして同12年の薬品会には重賢が珍蔵とされる「鼯鼠」を持参して参加していたというのである。

以上の内容から知りうることは、重賢と薬物に詳しい幕府医官や本草家との結びつきがあったこと、それで同8年に藍水が西遊した際に熊本で調査が行われたことである。この時に椿寿は熊本で藍水と出会うこととなり、幕府の調査方法を知ることができたのではないだろうか。この経験があって、翌9年から再春館で鬮草会を始めることができたものと考えられる。すると2年後の同11年に椿寿は、重賢から藤井源兵衛とともに西南方面の海辺で、枳実の調査を命じられている。これについての記録が次のものである²⁰⁾。

村井椿寿・藤井源兵衛兩人ニ被仰付枳実之吟味仕候様ニ有之、西南之方海辺〜巡見仕、枳実を吟味仕、枳実之木指上申候得者、御後園ニ御自から御植被遊候、夫方御国枳実と申物多く被行、出申候、誠ニ御慈悲之思召と奉存候、難有儀奉存候

ここには、椿寿と源兵衛が採取した枳実を、重賢自ら「御後園」に植えたことある。御後園とは、藩主の館である花畑邸の庭園と考えられる。枳実とは枳殻の未熟果で、薬物である。まずは重賢の傍に植えられたが、後に藩内で栽培が始まったことは、藩主の慈悲によるものと椿寿は記している。藍水が熊本に来た後、椿寿と源兵衛は藩主の指示で幕府の採薬使のようなことをするようになっていた。ところが翌12年に椿寿は再春館を辞して、同13年に京都の吉益東洞に入門する。

二. 村井椿寿の『熊府薬物会目録』

これより検討を始める『熊府薬物会目録』とは、

村井椿寿が宝暦14年（明和元年）6月に熊本で薬物会を開催した際の出品目録である。本稿で用いるのは、熊本大学薬学部薬学ミュージアム所蔵本である²¹⁾。椿寿が主催した「熊府薬物会」は「善音堂薬物会」ともいわれ、同日録は『肥後醫育史補遺』で取り上げられている²²⁾。しかしこれには出品者・出品物に関する情報がなく、史料も部分的な提示であるので、本節では、出品者・出品物に焦点を当てて記載内容を表にまとめ、椿寿の薬物会について具体的にしたい。

①「熊府薬物会」の開催

「熊府薬物会」開催までの経過や準備について、椿寿は『熊府薬物会目録』の序文で次のように記す。

東肥（肥後）は西側を海、東側には山が連なり、庶品土物としてあらゆる物産がある点では西藩第一である。先人（父見朴）は本草学を好んで自園において種芸をし、遠診では薬草を採取して戻った。再春館の教授となってからは藩産の薬種を質し、次いで生薬を弁じて真偽を極める気質をつくり、医師に薬草を採取して薬剤を備えることを求めた。そして同8年には諸生に命じて、再春館に1日で3168種の薬物を集めたことある。これは田村藍水の調査のための採集をいっているのであろうが、その説明はない。

序文には引き続き、椿寿が再春館を辞してからのことについて、我が友人の藤井・荒牧が研究に切磋していたと記す。そこで同14年6月に、見朴の宿志を継いで椿寿の善音堂で同好の士とともに薬物会を開催することにしたと、開催に至る理由を述べている。ところで序文は、開催の4か月前、同2月の作成である。椿寿が大坂を発って熊本に戻るのは5月1日であるので²³⁾、この間椿寿は熊本にいる友人藤井・荒牧と連絡を取り、薬物会の準備をしていたことになる。

②「熊府薬物会」の社約

『熊府薬物会目録』には序文に続いて「社約」があるので、次に提示する。

社約

- 一、会之期毎年以六月六日為約，集在己牌，散不為之限
- 一、会之日余有病事亦不敢辭，諸君子若有病事必報，若有欲致示者欲，因便送致
- 一、会之譚要在弁正藥物不許雜議許
- 一、会之席食不必設，酒不必勸，唯烟茶可供
- 一、会次長幼可序貴賤不等
- 一、遠邇君子所在土物，及所藏蓄，唯願送致，苟有議，則急逋奉返
- 一、会之日若有所不知余者不敢拒，焉拒庶品未者幸賜相顧，若然者敢辭
- 一、会之日諸君子幸誨所識，請勿蘊藏，余亦不敢隱爾
- 一、会之品乞評於浪華旭山先生，不敢逞私識議
(句点は筆者による)

社約の記載内容を説明する。条文は、物産会を毎年6月6日に開催することから始まる。集まりには各自で牌(名札)を準備すること。第2条では椿寿が病気でも中止とはしない。参加者が病気の際は届け出て、出品物は送付することと、出品者は原則として出席とした。第3条では、善音堂は薬物の見極めを目的とする会であるので、雑議は無用。第4条では、会の席で供するものは煙草と茶のみ。第5条では、席順は長幼順。第6条では出品物は送付を願うが、必要となれば急ぎ返却する。第7条では、会には椿寿の知らない薬物も出品でき、互いに検討する。第8条では、会の当日は教え合い、疑問をそのままにしないようにとし、最後の条で出品物については「旭山先生」に評を乞うとした。

旭山とは、平賀源内の師であり、大坂で薬品会を開催していた戸田旭山のことである。椿寿は旭山を熊府薬物会の指導者として掲げているが、このためには大坂にいる旭山から、事前に協力の合意を得ることが必要である。では椿寿がどのように旭山と対面したのかというと、序文を作成して約2か月後の5月1日に椿寿は熊本への帰路に着くのであるが、この間のこととして「此時永某ナルモノ、瘵ヲ患ヘテ、病ヲ浪花ノ僑居ニ養フ、余

遂ニソノ病ヲ問フテ、ソノ僑居ニ至ル、談話数日、手ヲ把ツテ相泣ク、五月朔、別ヲ告テ西帰ス、骨肉ノ親ニ離ル、カ如シ、嘘唏言フ事能ス」²⁴⁾と、椿寿が浪花の永富独嘯庵を見舞った際に数日談話したとある。これは椿寿に、大坂で旭山と打ち合わせをする時間があったことを伝える記述である。

旭山と椿寿との出会いは詳細でないが、藍水と源内、源内と旭山という、源内を通しての師弟関係があり、こうした人間関係のなかで椿寿は旭山と出会い、薬物会を開催することができたことになる。

三. 出品物と戸田旭山

6月6日に開催された熊府薬物会には、42人から207種の出品があった。大坂からの出品物は5月8日に、南都からの出品物は5月23日に受領したことが、同目録に記されているので、準備が計画的に進められたことがわかる。本節ではこれらの出品者を居住地ごとに分け、さらに出品物を付して表にまとめた。これをもとに熊府薬物会についてみていくが、表の順番は『熊府薬物会目録』の記載順である。なお出品物には産地を記し、各出品物に椿寿と旭山の問答があれば、「^{チン}椿」(椿寿の実名)・「齋」(旭山の通名)を付した。

①椿寿と戸田旭山の出品物

椿寿の出品物は表1にある30種である。椿寿の出品物の特徴として、品数は再春館の鬮草会からすると極めて僅少であるが、鉱物5種、植物18種、動物7種と3部門にわたり、バランスの取れた割合で厳選された品々であるという²⁵⁾。このうち14種には椿寿の説明や質問があり、旭山は9種について意見を述べている。このことから実際に旭山の指導があったことが判明する。

いっぽう旭山も、15種を出品している(表2)。熊府薬物会の直前5月23日に、旭山自身も大坂で薬品会を開催しており、準備に追われるなかでの協力である。旭山が出品したものは、遠くは松前産の樺皮紅白二種類や琉球産の野蘭など、全国からの蒐集物である。そして旭山は椿寿の出品物「十二時蟲」について、椿寿の質問がないにもかか

表1 主品（村井椿寿） 30種

| 品名 | 主産地 | 問答 |
|------|-------------|---------|
| 鉛石 | 益城郡矢部山 | 朮・斎按 |
| 石蛇 | 八代郡鏡ノ浜 | 朮・斎按 |
| 雷斧 | 益城郡免ノ原 | 朮・斎按 |
| 木葉石 | 飽田郡金峰山下の面木村 | 朮・斎按 |
| 方解石 | 八代郡海中白嶋 | 朮 |
| 芙蓉藤 | 飽田郡高橋村 | 朮・斎按 |
| 土大黃 | 益城郡矢部山 | 朮 |
| 大戟 | 飽田郡海浜梅党 | 朮 |
| 山豆根 | 益城郡矢部山 | |
| 鬼見愁 | 八代蒲葵島 | |
| 延胡索 | 近道処々 | |
| 水芋 | 飽田郡亀井 | 朮・斎按・斎謹 |
| 漏蘆 | 金峰山 | 朮 |
| 朮 | 阿蘇郡諸山 | 朮 |
| 當歸 | 阿蘇郡諸山 | 朮 |
| 藜蘆 | 飽田郡松丘山 | 朮・斎按 |
| 葶藶 | 宇土郡牧山海浜沙地 | 朮・斎按 |
| 金花蘭 | 矢部山 | |
| 枳 | 松丘 | |
| 秦皮 | 矢部 | |
| 桂 | — | |
| 冬柿 | — | |
| 芫花 | — | |
| 蜥蜴 | 益城郡飯田山 | |
| 地胆 | 矢部山 | |
| 斑猫 | 飽田郡万日山 | |
| 龍虱 | 近道水田中 | |
| 海蛆 | 飽田郡近津海辺 | |
| 熊膽 | 矢部山 | |
| 十二時蟲 | — | 斎按 |

わらず意見を寄せている。旭山が椿寿の薬物会に、積極的に参加する様子が伝わる。

椿寿の薬物会は、当時江戸と大坂で盛んに行われていた薬品会を熊本で開催するという、壮大な計画であった。これは椿寿が吉益東洞に入門するために上京したことでの新展開であり、熊本の物産学に大きな成果をもたらすこととなった。

②藩外からの出品者

では出品者のうち、先に藩外からの出品者についてみる。大坂周辺から15名（表3）、南都から8名（表4）、長崎から3名があった（表5）。各表には、宝暦10年に旭山が大坂加治屋町浄安寺で開い

表2 戸田旭山の出品物（15種）

| |
|----------------|
| 鶴頂草（江州伊吹山産） |
| 澤瀉（丹州種・仙台種） |
| 薺草 |
| 矮蓼（能州鷓鴣飼洞産） |
| 樺木（赤白二種、信州木曾産） |
| 樺皮（赤白二種、松前産） |
| 瓜帯（越前産） |
| 綿大戟（古渡今薬肆絶無） |
| 松子（播州高砂尾上名産） |
| 野蘭（琉球産） |
| 蜆殻（参州新居・羽州象潟産） |

表3 大坂周辺からの出品物(15人64種, 5月8日領納)

| | 出品者(居住地) | 品名 | 問答 |
|-----|------------------|--|---|
| | 三浦迂斎兄(播州高砂) | 石綿(播州産) 火照炮(紅毛産) 焼米化石(仙台高館ノ城跡産) 桜石(丹波桜ノ天神社内産) スルスミ石(隠岐州産) 瓢石(摂州有馬産) 然土(越後産) 燃水(越後産) 紅花化石 海松露(播州高砂海中産) | 鈍按・斎按 鈍按 鈍按 鈍按 鈍按 鈍按 鈍按 鈍按 鈍按 鈍按 |
| 文 | 宮城玄忠兄(浪華) | 玄精石(漢渡) 鍾乳(和州大峰洞中産) 烏葉葉 白葉子(漢渡) 白樺子(紀州産) | 鈍按 鈍按 |
| 文 | 木村吉左衛門(浪華) | 磁石(甲州御嶽産) 霊櫃(越中立山産) | |
| 文・東 | 重岡見昌兄(河州中野村) | 石膏(河州交野郡産) 婆羅得(不記出処) 独脚仙(和州金峰山産) 扶移葉(不記出処) | |
| | 大口怨安兄(大坂) | 明砂(不記出処) 烏葉(唐種重出) 金星石(但馬生野産) | |
| 文 | 内田七右衛門兄(和州吉野下市) | 水精砂(和州南都産) 焼米砂(和州平野郡信貴山) | |
| | 前田弥治兵衛兄(河州若江郡中田) | 太一禹餘糧(河州伊駒山産) | |
| 文 | 林隆庵兄(河州若江郡中田村) | 青滑石(和産) 硬石膏(城州産) | |
| 文 | 坂戸孫三郎兄(河州平野村) | 杉石(和州芳野川上産) | 鈍按 |
| 文 | 山田順庵兄(大坂) | 代赭石(漢古渡) 緑礬(勢州産) 黒石脂(城州北山産下品) 石蛤(美濃産) シデノ木化石(能州石動山産) | 鈍按 |
| 文 | 山田正因兄(大坂) | 石英雲母(河州鏡山産) 紫石脂(城州上品) 青瑪瑙(佐渡) 滑石(京三条東大日山産) 海燕 | 鈍按 |
| 文 | 古林杏節兄(大坂) | 石炭(紀州千里濱産) 松化石(不記出処) 木葉石(播州奥畑産) 石膽二種(一ハ八十年前漢渡) 石膏(和州産) | |
| 文 | 山瀬治右衛門兄(紀州和歌山) | 石梅(紀州産) 石花(紀州産別種) 石炭(同上々品) 凝水石(同上) 石綿(同上) | |
| | 田中祐藏兄(紀州和歌山) | 金剛砂(河州古市郡飛鳥村産) | |
| 文・東 | 森野賽郭翁(和州松山) | エレン艸(白葉子・黒葉子ノ類ナラン) | 鈍謹 |

表4 南都からの出品物（8人27種，5月23日領納）

| | 出品者 | 品名 | 問答 |
|-----|-----------|--|--------------|
| | 杉野佐兵衛兄 | 防己（ツ、ラフシ・ハスノハカツラ） 霊樞（立山産） | 朮按・斎按 朮按 |
| 文 | 井上平五郎兄 | 太乙禹（和州生駒産） 禹餘糧（南都水谷川産） 石墨（同上） | 朮按・斎按 斎按 |
| 文 | 和角養軒兄 | 青石脂（和州三笠山産） 赤石脂（和州芳埜産） 黒石脂（城州貴船産） | |
| 文 | 安倉茂左衛門兄 | 洗石（和州三笠山産） 石蚕（南都産） | 朮按・南都藤田生云，郭曰 |
| | 古梅園 松井和泉兄 | 草膠（手製） 樺皮（メカワ・ヲカワ，松前産） | |
| | 矢野意計兄 | 榛皮（大草・小葉） ボダイジュ（木欒子・欒華） | 朮按 朮按 |
| | 藤村佐兵衛兄 | 雲母（三笠山産） 虹翅（漢産） | |
| 文-東 | 藤田七兵衛兄 | 黄連四種 草蓯蓉（和州譚山産） 椿二種（城州北野産霊椿・城州新田産） | |

表5 長崎からの出品物（3人11種）

| | 出品者 | 品名 | 問答 |
|---|-------|--|--------------------------|
| 文 | 柳龍元 | 茅山蒼木 廣東橘皮 川中黄連 | |
| | 樺島道斎 | 白膽礬（華産） 巴且杏（紅毛産） 自然銅（華産） 玄石（同上） 郁李仁（同上） ハコ子クサ（箱根山産） | 朮按 斎按 |
| 東 | 山本利源次 | 薇薔（華産） 海椰子（紅毛産） | 朮按・斎按 |

た薬品会の記録『文会録』にみられる15名の名があるので、該当者は表中に「文」と書き入れ、また同12年に平賀源内らが江戸で開催した「東都薬品会」で全国出品物の「諸国産物取次所」となった5名も含まれるので、これについては「東」と付した²⁶⁾。

では主な出品者についてみる。表3には文人・博物者として著名な大坂の木村吉右衛門（兼葭堂）の名前がある。そして同12年に江戸で開かれた源内の薬品会に「海馬（和名ウミウマ，リュウグウノコマ，タツノオトシゴ）」を持参した，播

磨高砂の三浦迂斎の名前がある。同じく表3の和歌山の山瀬次右衛門は、同10年に源内が貝類採集のために紀州旅行をした際に知り合った本草家である。表5には源内の著書『物類品隲』に、宝暦9年の薬品会で「使君子（和名シクンシ）」の漢種一根を田村先生に送ったという、長崎の山本利源次の名がある。利源次は中国やオランダから輸入される薬種類の鑑定に従事していた薬種商で、同12年の薬品会にも「多羅」を持参した²⁷⁾。

椿寿と旭山の問答をみると、表3では三浦迂斎・宮城玄忠・坂戸孫三郎・山田順庵・同正因・

森野賽郭の出品物に椿寿は質問・意見を述べているが、三浦迂斎の「石綿」に対する椿寿の問いには旭山の回答がある。表4の安倉茂左衛門の出品物には、椿寿と南都からの出品者藤田七兵衛と郭(森野賽郭)の問答がある。安倉茂左衛門が出品したのは和州三笠山産の「洗石」で、方言では「アカスリシ」といった。椿寿が「コレ本名何ノ書ニ出スルヤ」と質問すると、藤田は「山海経西山経華山之首曰、銭来之山、其上多松、其下多洗石云々」と答え、賽郭は「澡洗可以礎〔字彙 初兩反礎尾石洗物〕體去垢圻云云矣、任臣按楊慎云、洗石去垢之石、今南中有之」と応じたところから、両者は実際に熊本の薬物会に参加していたことが確認できる。なお賽郭は享保14年(1729)に幕府の採葉使植村左平次の見分に同行して森野薬園を興すと、同17年・20年・寛保3年(1743)と3回にわたって植村から指導を受けた本草家である²⁸⁾。以上のような著名な本草家が、椿寿の薬物会に参加した。

③熊本藩からの出品物

『熊府薬物会目録』の最後は藩内からの出品者である。14名が72種を出品した(表6)。このうち米田大夫とは、家老米田氏である。町野玄璋は藩医、太田久伯は再春館師役、赤星・柴田・伊佐・宗・桑満・有住・飯星は民間医、これに本田善之允という薬種商、馬医の野村孫左衛門、さらには武官である高橋弥十郎まで参加している。高橋弥十郎は12品目を出品し、国内では薩摩・信州・和州・佐渡産、そして中国渡来の薬物も出品した。薬種商である本田善之允が出品したのは紅毛産・イギリス産と、西洋の薬物である。そして伊佐元登・宗梅醇・桑満元俊や前出の本田善之允は家園からの出品というのであるから、宝暦14年の熊本にはかなりの物産家が育っていたことがわかる。

これらの出品物にも椿寿の意見・質問や、旭山との問答が記されている。このうち米田大夫出品の「水玉」には、椿寿・旭山の問答に大坂の山田生(順庵・正因のどちらかは不明)も加わって、椿寿が「乃水精ノ水ヲ包ムモノ大サ消梅子ノ如

シ、肉ニ七分許ノ水アリ、明瑩愛スヘシ、重サ和秤ノ三分アリ、上ニ小鼻アリ、蛮人ノ説ニ此物ヲ蔵セハ、海上或ハ軍中ニテ渴シタルトキ、コレヲ以水ヲ取ルノ法アリト、謹テ高評ヲ乞フ」と質問すると、旭山は「玉ト水精ト相似タリト云トモ、同類異種不可混、然レトモ、高評ヲ考ルニ、別是一種ノ白玉坎、真可謂異宝矣、往年老父薬物会ノ時、貯水水精ヲ具スルアリ、其長五寸許圍、五寸許中ニ水六七分アリ、転倒ニ随テ水亦下流布有ノモノナリ、又昨年ノ会ニ白石英ノ長五六寸、周圍五六寸、貯水八九、今は亦奇物ナリ」と意見を述べ、大坂の山田も「疑ヲクハ、昔年紅毛人所将来ノメカフト呼為モノナラン、子嘗聞ク其物至テ円小ナル硝子ノ上ニ紐アリ、中ニ薬水ヲ貯フ、紅毛人謂フ、コレヲ以テ眼眶ヲ摩レハ、能ク目ヲ明ニスト云」と詳しく説明している。これも旭山や山田が実際に米田大夫の水玉を見て、問答した内容である。

ところで宗梅醇の出品した「丹参」であるが、これについて『熊府薬物会目録』には「藤井生云、丹参ニ非ス、山津根ナリ」とある。藤井生とは、熊本で椿寿に代わって薬物会の準備をしていた藤井源兵衛である。源兵衛以降、藤井家は熊本藩の薬園と深く関わっていくので、これについては次節で詳しくしたい。

四. 薬物会と熊本藩の医師

①藤井家と村井見朴・椿寿

熊本の薬物会は村井椿寿が主催したが、開催にあたって京都にいた椿寿に代わって熊本で準備をしたのは藤井・荒牧の2氏であった。荒牧とは椿寿の門人荒牧玄齡のことであるが²⁹⁾、藤井については父見朴との関係もあるので、再春館創設以前から説明することにした。

宝暦6年10月に、藩は薬園管理のために藤井四郎兵衛(源兵衛)を任命した。源兵衛とは見朴の家塾時代からの門人で、「楠寿」を名乗っていた³⁰⁾。再春館が開講した際の受講者名簿³¹⁾に「藤井楠寿」とある。この源兵衛が椿寿の薬物会を支えていた³²⁾。

次に見朴と藩主重賢の関係であるが、重賢は兄

表6 藩内からの出品物（14人72種）

| 出品者（職） | 品名（産地） | 問答 |
|----------------------|---|--|
| 米田大夫（家老） | 水玉 | 朮按・斎按・山田生曰 |
| 赤星見淳（矢部医士） | 石ノアブラ（矢部白小野村産） 地澁（同寺川村産） エノ木ナバ（同犬銅村城跡産） 直根人參（同） 零陵香（同） | 産地 朮按 |
| 柴田宗碩（矢部医人） | 鉄朱（矢部山産） 温石（同） 鑽石（日向州高知穂山産） ツチスミ（矢部山産） キノワタ（同） ハカマソウ（同） 石長生（同） カラカサソウ（同） 藜蘆（同） 菴藺（同） カヂ（同） | |
| 太田久伯（再春館司貨） | 鍾乳石（球磨産） 鱗蛇皮（華渡） | |
| 野村孫左衛門（本藩馬医） | 石貝（葦北産） タダイコン 木瓜 無名石三種 | 斎按 |
| 伊佐元登（熊都医師） | 砒石（華渡） 硫黄（阿蘇山産） 山査子（家園） | |
| 高橋弥十郎 （本藩鳥銃隊二十名長） | 赤石脂（佐渡州産上品） 代赭石（華渡，中品，中古渡モノ） 石墨二品（和州春日山産，江州鎌郡産） 焼石（信州浅間山産） 熬海鼠（薩州産ト云，モト琉球ヨリ来ル） 小章魚（薩州産） 紅麴（漢産） 藕粉（浙江省杭州府産） 海盤車（肥後産） 古磚（大宰府都府楼古瓦） 龍齒 | 朮按 朮按 朮按・斎按 朮按 朮按・斎 |
| 町野玄璋 （本藩典薬町野玄寿嗣子） | 蛤蚧（華渡） ビリ、（紅毛産） 紅麴（華渡） 金星石（上郷山中産） 銀星台（同上） 燕窩菜（華渡） 見腫消（八代産） | 斎按 |
| 宗梅醇（熊都壺井医人） | 蛇脚草（家園） 丹参（菊池姫井村産） 百部（華渡） | 朮按 藤井生云 朮按・斎按 |
| 桑満元俊（菊池医人） | 木香（家園） トラノヲ（龍田山産） | |
| 本田善之丞（熊都薬肆） | 白朮（華渡） 山芙蓉（家園） スランカステン（紅毛産） 眼茄（同上） カナノウル（同上） 赤梅檀 馬糞石（本名未考） 萬歳亀（イギリスノ産） 醉答（出処失） 古瓦（出処失） | 斎按 斎按・朮按 朮按・斎按 朮按・斎按 朮按・斎按 齋按 |
| 有住祐宅（熊都古町医人） | 魚石（壱岐産） 石蚌 水精（不記出処） | 朮按 |
| 飯星元達（馬見原医人） | 琥珀（華産） 薰陸（同上） | |
| （失名） | 虎掌 五種 | 朮按 |

宗孝の急死を受けて、延享4年(1747)に藩主となった。この時期になると見朴の医師としての評価は高く、重賢家督の前年に幕府の巡見使夏目藤右衛門が薩摩で病気になった際には、町医でありながら熊本藩から派遣された。そして重賢が寛延3年(1751)に健康を害した際には「御脉御伺」を命ぜられ、その後藩主に「御目見」できる医師となり、所持する家屋敷が「拝領地」の取り扱いを受けるほどに信任を得て³³⁾、見朴には重賢と対話する機会があった。いっぽう源兵衛は見朴の門人であったので、見朴の鬮草会に参加していた。こうした背景があって、再春館が設立されると見朴の門人が師役や学生となったように³⁴⁾、源兵衛が蕃滋園の管理人に採用されたのであろう。

藩主重賢が宝暦8年から天明3年(1783)にかけて、約70人の大名に宛てた書状を控えた『重賢公御代御代筆控』³⁵⁾という一冊がある。このなかに明和5年(1768)5月8日付の上総介宛書状がある。上総介の苗字は判明しないが、「久住梅」を所望したことに対して、重賢は熊本や久住山にあるので「御薬園掛藤井源兵衛と申す仁、随分案内候よし」と、源兵衛を紹介している。明和期になると源兵衛は薬園掛として藩主から認められ、他大名への書状に名が記されるほどになっていた。

この源兵衛を蕃滋園管理の初代とすると、2代目となる倅景助も「御薬園方之儀心懸能、巧者相勤」と評価された。寛政10年(1798)に景助は病死するが、3代目となる景助の倅健吾も前年10月に「物産之儀心懸厚有之候に付、為稽古料式人扶持被下置」と、父の生前から物産家として教育され、父景助の死後は「御薬園方御役人」を引き継いだ。文化8年(1811)7月には「本草之学問宜、産物之監督定抜群有之、再春館本草之会頭・物産教導心懸厚出精致し、進歩之諸生も有之、薬草木仕立等格別宜、本草家之療治習熟、病用手広致出精候に付変業被仰付、御給扶持・御足給共持懸にて御目見医師被仰付、物産師役被仰付候」と、熊本藩を代表する本草家となり、再春館では物産学の師役をつとめ、医師としても薬物の知識を診療に活用していたという³⁶⁾。つまり見朴の門人であった源兵衛が蕃滋園の管理人となり、椿寿とと

もに薬物会を開催して物産学に専念したことで、熊本藩の物産学は藤井家を中心に展開することになったのである。

②医師と薬物

4代目となる健吾の養子楠寿は、天保9年(1838)5月に「薬園仕立見習」となる。前年4月には「物産習熟致候に付、諸生引廻被仰付」との評価を受けており、養父健吾と同様に蕃滋園の管理を主な業務とする傍ら、再春館では医学生を指導した。その後の蕃滋園は、明治4年(1871)の廃藩置県で藤井家の個人庭園となる。旧藩時代の薬園については、5代目景倫が同6年にまとめた『蕃滋園植物目録』³⁷⁾で知ることが出来る。植栽の総計は829種、一般的な国産薬草・薬木を中心に、漢種・アメリカ産や領内久住・阿蘇や城下近郊の金峰山周辺の草木である。これらは藤井家が開設以来一貫して蕃滋園を守り、蒐集した結果である。

ところで、藤井氏を熊本藩の物産家として育てた椿寿であるが、明和9年(1772)にまとめた「再春館学規会約刪定」のなかで、椿寿は物産学と医師との関係について次のように述べている³⁸⁾。

物産本草ノ学ハ又一家ノ事ナリ、然レ臣コレ亦治方ノ本ニナレバ、本艸学ノ先務ハ日用使ヒ施ス所ノ薬品ノ真贋ヲヨク弁別シテ、ソノ効功ヲ知ルニ過グル教ハナシ、今ノ物産家ト云フモノ、ヤウニスルベカラズ、余力アル人ノコレヲスルモ亦止ムニマサリ、然レ臣時珍ガ本草ヲ本業トスルハナシ、コレ未訂ノ書ニテ杜撰最甚ダシ、医館ナドニ掲ゲ示ス書ニアラズ、コレ此ノ時、古本草ナキヲ以テ、先君子已ムコトヲ得ズシテ、暫ク此ノ書ヲ取レリトイヘ臣、規矩トスルニアラズ、故ニ鄙俚ナルモトノイヘ臣、陳嘉模ガ薬性歌ヲ講ジ玉ヘリ、此ノ歌ノ内ニ脱セル薬品ハ、余ヲシテ三四首ヲ補ハシム、今再春館ニアル蔵板ノ薬性歌コレナリ

(傍点は筆者による)

ここで椿寿は、物産学とは日用の薬品の真贋を弁別することで、医師の本業ではないと述べてい

る。再春館には「薬性歌」³⁹⁾を掲げているが、これは医館に掲げる内容ではないとも言っている。椿寿の主張とは、薬性を知って治療に供することが医師の仕事であって、物産学は医業に必要な知識の一部ということである。父見朴も物産は直接的には医師の業ではないとしながらも、薬性を知ることが必要と『再春館会約』で謳っていた。椿寿はこの方針を引き継いだのである。しかし椿寿が「再春館学規会約刪定」をまとめた明和9年頃になると、同6年に旭山も死去し、藤井源兵衛も薬園の管理人として知られる存在となっていたことで、薬物会から手を引くようになっていたのではないだろうか。かつて村井家を調査した山崎正董は「村井家年譜」を見て、椿寿の薬物会は天明元年（1781）6月が最後であることを確認している⁴⁰⁾。

椿寿は古方派医師吉益東洞の代表的な門人であったが、入門のきっかけは長崎でオランダ外科に関心を寄せた永富独嘯庵、同じく長崎でオランダ内科を学んだ合田求吾、独嘯庵の門人亀井南冥との出会いであった。京都では吉益塾で多くの門人と出会い、また熊本の家塾では他藩からの門人を多く受け入れて、藩外の情報を得ていた。これに安永3年（1774）には杉田玄白らにより『解体新書』が出版されるなど、医界は着実に進化していた。家塾で門人の指導に追われていた椿寿の関心が、薬物会から離れていったことは当然の成り行きである。

いっぽう藤井家3代目の健吾が再春館の師役となったのは文化8年（1811）7月、再春館における物産の師役の初代はこの健吾である⁴¹⁾。この時はまだ椿寿（同12年没）が存命中であるので、任命にあたっては椿寿の後押しもあって、健吾による物産学の講義が始まったものと考えられる。見朴と椿寿が意図したことは、藤井氏によって実現したのである。

最後に、熊本藩では医療に関わる薬物の研修が医学修業において定着していたことを、熊本藩医鳩野家の家塾を例にみる。鳩野氏の当主は代々宗巴を名乗った外科医であって、吉益流のような本道の医家ではない。7代目宗巴は文政8年（1825）

から再春館で学び、天保7年（1836）に豊後岡藩の医師に入門して華岡流医術を学んだ後、同10年に熊本に戻ると亦楽舎という家塾を開いて門人を教育した。この亦楽舎で行われていたのが採薬旅行である⁴²⁾。亦楽舎では採薬旅行のために次の規定を定めていた。

掟

明二十三日為採薬西山行致候に付、誓約左之通

一、内生外生之内、先後二勢に分ち、先勢は朝五ツ時出宅、後勢は昼九ツ時出宅之事

但、当番を省き式拾人之内四人を先勢と定、拾六人は後勢と定候、尤名付は別紙に有之候事

（以下、「股引・半切着之事」「銘々腰兵糧之事」が続く）

ここに記されている西山とは、熊本城下近郊の山のことである。採薬に出かけるのは20名と定め、時間をあけて二手に分かれて出かけたとある。再春館で物産師藤井健吾から指導を受けた7代目宗巴は、採薬を家塾の重要な行事として、これを自身の家塾でも実践していた。つまり再春館で学んだ医師や、7代目宗巴のような再春館で学んだ医家のもとで修業した医師は、薬物の知識を背景に医業を実践したのである。

結語

近世中期には諸藩で薬園が開設されたが、熊本藩で特記すべき点は、医学校と薬園が同時に設立されていることである。この時期の熊本藩は藩政改革期にあり、医学校は藩の方針で設立された。ここで登用されたのが村井見朴と椿寿（号：琴山）父子であった。見朴は、医師は薬性を知って治療にあたるべきとの考えをもっていたが、開講からまもなく死去したため、その長子椿寿がその意志を引き継いだ。椿寿は当時台頭していた古方派吉益流の医術を熊本に取り入れるとともに、江戸・大坂で行われていた薬品会を熊本で開催して、藤井氏という物産家を育てた。これにより再春館には物産家から直接、薬物の指導を受ける教育課程

ができることとなった。つまり椿寿が薬園の機能と医学教育とを結びつけたことで、再春館に漢方の医学校としての教育体系ができたのである。

では再春館の教育体系が固まる19世紀前後からの全国的な医学の発展に、藩の医学教育機関である再春館はどのように対応するのか、本稿では鳩野家の家塾について少し触れたが、次は藩の医学校と個別医師の家塾との関係について検討を進めたい。

謝 辞

本論文は、公益財団法人武田化学振興財団、2017年度杏雨書屋研究奨励による成果である。

注

- 1) 松崎範子. 村井椿寿(琴山)の『漫遊説』. 日本医史学雑誌 2018; 64(3): 299-310. 同. 村井椿寿(琴山)と吉益東洞. 日本医史学雑誌 2019; 65(1): 43-65
- 2) 江戸時代の医学教育. 坂井建雄編. 日本医学教育史. 宮城: 東北大学出版会; 2012. p. 15
- 3) 山崎正董. 肥後醫育史. 熊本: 鎮西医海時報社; 1929. p. 224-230
- 4) 前同. p. 126-130
- 5) 上野益三. 日本博物学史. 東京: 平凡社; 1973. p. 386では、宝暦14年2月と6月と椿寿は2度にわたって薬物会を開催したとあったが、磯野直秀. 日本博物誌総合年表. 東京: 平凡社; 2012. p. 316でも『熊府薬物会目録』の解析が進んで、6月開催が確定。
- 6) 大石学. 享保改革期の薬草政策. 享保改革と地域政策. 東京: 吉川弘文館; 1996. p. 470-506
- 7) 東都薬品会: 早稲田大学図書館; 古典籍総合データベース. https://www.wu1.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08_b0176/index.html
- 8) 享保16年(1731)に上巻・中巻, 下巻が同19年頃, 続編は元文3年(1738)刊行された薬物学書. 『傷寒論』『金匱要略』に用いられた薬物など180種に対する薬能・鑑定・自説がある(小曾戸洋. 日本漢方典籍辞典. 東京: 大修館書店; 1999. p. 35)
- 9) 山崎正董. 肥後醫育史補遺. 熊本: 鎮西医海時報社; 1931. p. 4
- 10) 前同. p. 4-5
- 11) 前同. p. 15. 253種の草木を集めたところ
- 12) 前掲. 肥後醫育史. p. 40
- 13) 前同. p. 125
- 14) 前同. p. 115・127. 見朴は宝暦元年に失明. 中心となったのは椿寿である. 見朴は同10年11月に死去
- 15) 肥後文献叢書第一巻. 東京: 隆文館; 1909. p. 9
- 『銀臺遺事』は時習館教授高本紫溟が寛政2年(1790)に奉じたもの. 見朴の事蹟をうけての記述と考えられる
- 16) 以德政要. 新熊本市史史料編近世I. 熊本市: 熊本市史編纂委員会; 1994. p. 312
- 17) 前同. 肥後醫育史. p. 196
- 18) 山崎正董書写. 熊本大学医学部肥後医育ミュージアム所蔵
- 19) 生写総目録. 新熊本市史通史編近世II. 熊本市: 熊本市史編纂委員会; 2003. p. 967-986
- 20) 前掲(18). 椿寿雑録
- 21) 写本が国立国会図書館・西尾市立図書館岩瀬文庫・乾々斎文庫などにある. 薬学ミュージアムのものは岩瀬文庫の写本. 資料番号: 449.9-Y.96
- 22) 前掲. 肥後醫育史補遺. p. 15-18
- 23) (24) 前掲. 村井椿寿(琴山)の『漫遊説』. p. 304
- 25) 浜田善利. 『熊府薬物会目録』所載の薬物の研究 主品三十種について. 薬史学雑誌 1985; 20(2): 108-116
- 26) 文会録. 国立国会図書館デジタルコレクション. <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537082>, 及び前掲. 東都薬品会で確認
- 27) 山本利源次・三浦迂斎・山瀬次右衛門の説明は、芳賀徹. 平賀源内. 朝日選書379. 東京: 朝日新聞社; 1989. p. 124-125
- 28) 上田三平著・三浦三郎編. 増補改訂日本薬園史の研究. 東京: 渡辺書店; 1972. p. 170-177
- 29) 前掲. 村井椿寿(琴山)と吉益東洞. 椿寿の家塾「原診館塾生名籍」より
- 30) 前掲. 肥後醫育史. p. 10
- 31) 前同. p. 56. 受講者名簿は村井家の旧蔵史料. 山崎正董はこれを引用したが、村井家史料は戦火で焼失.
- 32) 源兵衛の倅景助は、明和3年(1766)に「御薬園方役人」となる
- 33) 先祖附. 資料番号; 南東57: 村井家の項. 永青文庫所蔵; 熊本大学図書館架蔵
- 34) 前掲. 肥後醫育史補遺. p. 21
- 35) 新熊本市史通史編近世II. 熊本: 熊本市史編纂委員会; 1996. p. 979-986
- 36) 藤井家の先祖書は、前掲. 肥後醫育史. p. 204
- 37) 前同. p. 210. 2代目景助は『百草類纂』という本草学の著書, 4代目楠寿は『久住及西山植物採集目録』『阿蘇植物採集目録』を残した(前同. p. 139-140). 景倫の『蕃滋園植物目録』は、楠寿の目録による
- 38) 前同. p. 47. 明和9年の椿寿は、再春館の師役でも藩医でもなかった. これから再春館に対する強い思いが伝わる
- 39) 山崎正董書写. 回春業性歌附余. 熊本大学医学部肥後医育ミュージアム所蔵. これは240品目の薬種を歌にしたもので、宝暦8年9月に樺島道斎という再春館に入学した長崎出身医師の作. もとは復陽洞門人との椿寿の説明が山崎正董書写史料に有り

- 40) 前掲. 肥後醫育史補遺. p. 18
41) 前同. 肥後醫育史. p. 94
42) 7世宗巴が再春館に入門した年は, 鳩野氏所蔵. 家譜. その他の記述は, 前掲. 肥後醫育史補遺. p. 69-72

参考文献

- 酒井シヅ. 日本の医療史. 東京: 東京書籍; 1982
青木歳幸. 江戸時代の医学 名医たちの三〇〇年. 東京: 吉川弘文館; 2012

- 小曾戸洋. 日本漢方典籍辞典. 東京: 大修館書店; 1999
上田三平. 日本薬園史の研究. 東京: 渡辺書店; 1972
長崎大学薬学部. 出島のくすり. 福岡: 九州大学出版会; 2000
平賀源内顕彰会. 平賀源内全集上下. 東京: 荻原星文社; 1935
芳賀徹. 平賀源内. 東京: 東京朝日新聞出版局. 1989
福田安典. 平賀源内の研究 大坂篇. 東京: べりかん社; 2013

Medical School and Medicinal-Herb Garden Established by the Kumamoto Domain: Based on the Herbalism Workshops Held by Chinju Murai (Kinzan)

Noriko MATSUZAKI

Kumamoto University Medical Alumni Association YUKYOKAI

In 1796, the Kumamoto Domain established a medical school and a medicinal-herb garden. In the medical school, the parent organization of which was a private school run by medical practitioner Kenboku Murai, Kenboku's eldest child Chinju (pseudonym: Kinzan) devoted himself to improving the quality of education. Chinju incorporated what he had studied under Todo Yoshimasu in Kyoto into the medical education offered by the Kumamoto Domain. He also provided students with the opportunity to learn about medicinal herbs and plants by holding workshops under the guidance of Kyokuzan Toda, a Osaka-based herbalism scholar who worked with Gennai Hiraga, and Ransui Tamura (who later became a medical officer of the Edo Shogunate), in Edo and Osaka. Kenboku nurtured Mr. Fujii, who was one of his disciples and took care of the medicinal-herb garden, as an expert of herbalism. Thereafter, Mr. Fujii taught courses in pharmacognosy at the medical school. Dedicated efforts by Chinju to enhance the quality of medical education, following the policy of his father Kenboku, eventually made the Kumamoto Domain's medical school one of the most renowned medical schools specializing in herbal medicine (Kampo) during the Edo period.

Key words: Chinju Murai (pseudonym: Kinzan), medical school, medicinal-herb garden, Kyokuzan Toda, Gennai Hiraga